

## 私の保育 村瀬 君子

私が現在勤務している阿佐ヶ谷教会つぼみ会は、戦後の混乱期に近隣の幼児のために建てられました。以来何人もの保育者によって支えられてきましたが、特に幼児教育を勉強した人々だけではなく、様々な人が臨時に手伝ったりして形づくられてきました。

現在、遊びを大切にすることを考えていますが、つぼみ会に集まる全ての人々が各々主人公になり、見た目には何も特別ではない普通の生活をするという姿勢も、初期の様々な人々が必要に応じてつぼみ会の会員となったという時代から流れているように思います。

つぼみ会のもうひとつの特徴は、正式名称を「幼稚園」と呼べないことです。官庁用語にしたがえば「幼稚園類似の幼児施設」ということとなります。幼稚園に似ているところというわけです。しかし実践する私共にとって、何をすればこの名称に応えることができるかは理解し難いものがあります。公の認可

を受けていなくても（誰にも制約されない）、また幼稚園と呼ばれるなくても、毎日の生活の中で何をしなければならないかを問い続けることができるのであれば、どんなに小さくても幼児の集まる所として生き続けることができるのではないかと思っております。

今回与えられました機会に、そんなことから、昨年入園した男児K夫（昭和四十六年十月生）の入園直後からの行動を書き、その時々感想を述べさせていただきます。

### 年少男児K夫の行動から

K夫は言語によって人と交わることができませんが、時に応じて自分の意志を伝える方法は持っています。

入園後半月過ぎたある朝「フンフン」言っただけ嫌の悪いK夫は、教師の手をとって門の方へ引っ張っていきます。帰りたいと言っているのかと思ひ、「すぐお迎えに来て下さるわよ」と言っても全く受け付けず、門を開けると言うように教師の手を門にかけさせ、再三目で訴えているのです。どうしたらよいのかと一瞬は考えますが、この子どもの要求についてよく考えをめぐらす余裕などはありません。しかしK夫の要求通りにしてみようと心に決め、次の行動に移ることにしました。

第一日目は二、三十メートル程道路を歩きました。この方向は園からK夫の家へ続く道です。ある地点まで行くところと園の方へ向き直り、今度は機嫌よく門を入るのです。

入園前までは殆んど外出をしたこともないようです。家庭で閉じ込められていた生活から（狭い園庭とはいえK夫にとっては開放された広い）新しい生活に入り、更に登園時に母親と離れたりすることの不安や緊張が、K夫の朝からの呼吸を乱してしまうのかもしれない。今来た道に戻りたいという要求を聞き入れてくれる教師と手をつなぎ、登園の儀式を（日によって歩く距離は異なるのですが）やり直すことで、それ以後の時間を水遊びや泥んこに没頭できたように思います。

私たち大人は失敗ややり直しを恐れたり、恥ずかしく思ったりして、適当なところで物事をやめてしまいがちですが、朝の行事を通してやり直しによって立ち直るK夫を素晴らしい、どの子どもにもやり直しや失敗を自分で見つける機会を与えてやりたいと、つくづく思ったものです。

ところが朝の行事に新しい要求が加わってきました。園から外部へ出るには三か所の出入口がありますが、走りまわったり、たまたま門の側で遊んでいたりと、目の前の門から外

へ行きたい衝動にかられるのでしょうか。

門をガタガタとゆすり、開けて欲しいと訴えます。「開かないわね、よいしょ、よいしょ」と引く真似をしても、数分は困ったなという顔をして外を通る車を見ているですが、すぐにガタガタと始めます。教師も心を決め外に出ることになりました。門を一步出るとK夫の片手は教師とつながり、片方の手を振りながら、機嫌のよい時に発する「アッチャー、アッチャー」と

いう声も高らかに軽快に発音です。やり直しの件と異なるのは、楽し気な顔や声のまま近隣の商店（主にお菓子屋、パン屋等甘い物、アイスボックスのある店）に直行することでした。この行動の第一日目、ある商店の人から「こんな子どもを入れることにしたのか。縄でくくっておけばよいのに」と言われ、

悲しい思いをしたことは忘れられません。側ではK夫が袋菓子をつかみ、教師がその袋を元に戻そうと懸命になればなる程抵抗して床に寝そべってしまい、店の人には右の様に言われ……とほんの二、三分のできごとなのですが、とても長く感じられました。奮闘振りを御想像下さい。

その日の保育後の話し合いで「明日から皆ポケットに百円を入れておこう」と決めました。お菓子類を手にしてしまった時、店の人に咎め立てられないためには必要なことでしたし、

外部に出れば緊急の連絡に電話代も必要だと考えたからです。しかしこれは私共の立場からだけの提案であり、K夫の側に立って話し合ったことは、とにかくK夫の要求通りに動こう、動いてみようという決心をした事でした。要求通りに買いつけることがK夫にプラスなのかマイナスになるのか、どうしてやる事が一番よいのか分かりませんでした。K夫の要求をせんとはいは聞いてくれた」と満足することで何か通じるかもしれない、ここから道はきつと開けると信じ、毎日話し合い、その時々を表情や反応を報告し合う毎日でした。

「あの幼稚園は、一人だけ外へ行ったりする変な園」と思ったり言う人がいましたが、私共にとってはひとりひとりを大切にすると、この具体的な表われを、今のK夫にどのように示してやれるかが課題であったのです。そして近隣の批判に対して私共がとった居直りにも似た態度は、話すことのできないK夫の心と私共を結びつけたように思います。

五月になって暑い日が多くなると、外出の際に求めるものはアイスクリームが主になってきました。登園後一時間半位砂場、水遊び、粘土等と遊んだ後、側にいる教師の手を引いて門を開け、時には飛びこえて園外へ出たがるようになりました。

日によって違いますが、ひとつの遊びにかなりの時間集中した後であるため、喉のかわきと空腹、そして狭い園から広い場所へ次の活動を求めているのではないかと思います。

喉のかわきと空腹らしい点に気付いた時の解決策のひとつとして、離乳後間もない赤ちゃんの四回食的な要素を取り入れてみてはどうかということでした。母親と連絡し合い、食パン一枚程度を昼食用とは別包みにしていただき、門の外へ行きたがったら「食べよう」とすすめてみるということでした。家庭でも紅茶、コーヒー以外は飲まないということですので、水を飲んでみせ、飲める物であることを知らせました。その後もアイスクリームやジュースを欲しがることがあっても、間隔がほとんどあいてきたり、従って園外へ出ることも減って来ました。アイスクリームやお菓子をを通してK夫が本当に求めているものが何であるかを考える努力をする時、表面に出る行動そのものについて特別悩んだり、世間体を気にすることが少なくなってきた私自身に驚いています。

### K夫の行動と他児との関係

K夫の要求に応える日々の生活で、他の子どもの反応は様々でした。

K夫と園外の散歩から帰り、門に入った時にすぐ声をかけてきました。

A男「K夫ちゃんどこに行つたの？」

教師「お散歩よ」

A男「どこまで行つたの？」

教師「駅の方まで。A男ちゃんも行きたい？」

A男はちょっと考えていましたが、

A男「いい、僕は幼稚園で皆といる方がおもしろい」

教師「そう、行きたくなつたら言つてね」

A男「いい」と言いつつ内心は羨ましいに違いないと思ひました。「僕も要求すればK夫ちゃんと同じように聞き入れられる」と安心したようで、それ以後は庭の穴掘りに精を出す毎日になりました。

○

登園時の十五分間だけ門を開け「おはよう」の挨拶のため教師が立っていますが、三学期のある朝、すでに登園していた年長男児B夫が、再び門の所にやってきて、車の往来に気を付けながら門を飛び出しました。教師の目と合うと「ほくK夫」と言い道路を数歩歩いては喜んでゐるのです。母親との連絡では秋頃から家庭でも「K夫ごっこ」をしてゐるようで、B夫の要

求が理解できたように思ひました。K夫と同じ行動をすること、B夫自身が内に秘めてゐる要求が前面に出たように思ひます。現在小学校一年生のB夫は校外へ出られないことを知り、K夫ごっこをすることも許されないと知り、担任教師へその感情をぶつけることもできず、その苦痛を登校拒否という形で訴えています。

○

筆の先にポスターカラーをつけ、ふりまわしている間に紙に飛んだきれいな色の組み合わせに感心し、「これだれがかいたの？」「へーK夫くんもじょうずにかけるね」と言つたり、昼食時に友だちのお弁当箱に指を入れ、デザートを食べてしまつて「ありがとう」とこっくりをしている様子に、「K夫くん今日ね、ありがとうって言つたんだ」と降園後母に報告するC君、それを本当のことと思ひ喜んで降園後飛びこんで来たC君の母親。

毎日の生活の中で起きるちよつとしたことのひとつひとつを、当然のこととして流してしまわず、それぞれの中で感じる努力を、これからもしていきたいと思ひます。

(阿佐ヶ谷教会つばみ会)